

『恨の介』について

八木 恵美

はじめに

仮名草子の中でも初期の作品であり、後続の作品に影響を及ぼした『恨の介』は、「作者の意図がどこにあるのか」という点で、今なお研究者の意見が分かれたままのようである。

関東下野辺の由緒ある侍で色深き男、葛の恨の介は、清水の万燈会でたぐいまれな美女を見初める。思いがつのつた恨の介は、清水寺にお籠りし、千手観音のお告げをいただき庄司の後家を訪ね、美女の数奇な身の上を聞く。美しい姫、雪の前は、豊臣秀次の家老木村常陸の忘れ形見であり、現在は近衛殿の養女となっていた。恨の介は、雪の前と姉妹のように仲のよいあ

やめの前の協力を得、雪の前と一夜の逢瀬を約束する。八月十五日の夜、雪の前の局に忍び込み、思いをとげるが、「またいっそ。」と尋ねたところ、「後生にて。」と答えた雪の前の言葉を「後の世で。」と解釈し、病の床について絶望のうちに息をひきとる。雪の前は、恨の介の死の原因は自分の一言にあると知り、自分の罪深さを思い、死に至る。

以上が『恨の介』の概略である。神仏の加護により恋愛が成就するなど、中世にあった物語と交わりはない。しかし、この物語には一見、本筋とは全く関係のないように思われる記述が挿入されている。雪の前の身の上を、その乳母である庄司の後家が語り、その中で豊臣秀次と愛妃達の死について述べる場面である。それをどのように考えるかを中心に『恨の介』を見つ

めてみたい。本論では、時代背景から、それを探っていくという方法をとった。

一 人物設定

葛の恨の介は、どのような人物であつたのだろうか。作者が恨の介について述べている部分には次のようなものがある。

こゝに、葛の恨の介、夢の浮世の助、松の緑の介、君を思の介、中空恋の介とて、その比都に隠れもなく、色深き男どもあり。なかにも葛の恨の介と申せし人は、一段心細き人なりしが

我等田舎の者なれば、何の思はくをも知り参らせず。あれ程いつくしき花のやうなる御方様たちを、せめては目でなりとも見参らせ、我等が国へ帰りての物語に申さむため、若き時の習ひ御免あれ

自ら幼少より、小矢の本末も知らざりき比よりも

是は関東下野の辺に故有人と見えにける

野間光辰氏は、「色深き男ども」という点に注目され、恨の介等は、豪華な伊達衣装で都大路を練って歩いた当時の「かぶき者」ではないかと主張されている。

「かぶき者」について『当代記』(『史籍雜纂』第二巻)に次のような記事がある。

(慶長十一年)六月、此比、京町人北野賀茂辺江出行之御(慶長十一年)六月、此比、京町人北野賀茂辺江出行之御は、かぶき当世風相を此云を此云衆出合たはふれ、為之悩さる、其上耽之女色一、寛外之俄多之

これは、侍数人が、大町人である後藤・茶屋家の女房達に難題をふきかけ、かどわかして茶屋につれこみ、盃を強い、供の男や子女を付近の樹に縛りつけ、白刃をきらつかせて声をたてれば切り殺すとおどかし、あげくの果てに、日暮とともに逃げ去ってしまった事件をさしている。これに関係した「かぶき者」は、稲葉甲斐守通重、津田長門守高勝、天野周防守雄光、岡田久六、沢半左衛門、大島雲八、阿倍右京、矢部善七郎、野間猪之助、浮田才寿の十名であり、いずれも関ヶ原の戦い以後に徳川氏に帰属した武士で、重用されない不満を、徳川家に重用されている後藤・茶屋家におつけたものである。彼らは、改易、流罪の処分を受けたが、事件はこれでやんだわけではなかった。慶長十四年四月に『当代記』は次のような事件を載せている。

此比、刑組皮袴組とて、徒者京都充滿、五月擲取之、七十余被_レ行_二籠舎_一令_二糺明_一、此者廿_二(注・此者共か)人に普喧嘩を懸、後被_レ改_レ之、組頭を四五人成敗あり、残者共非_二指料_一、只一組之知音まで之儀たる間被_レ寛_レ之、組頭の名は左門と云者也、刑組とは人に喧嘩をかくるに依て也、皮袴組とは、刑にも劣さるとの儀也_{依_二此儀_一たは_二法度也_一、右之徒彼らは、御法度の煙草を愛好し、一管のキセルを吸い回して徒党の連盟を結んでいた。彼らは、喫煙の他には、さしたる罪を犯していないので処分された者は四、五人であつた。また「慶長日記」(「古事類苑」法律部)には次のような記事がある。}

慶長十七年六月八日、大鳥井逸兵衛と申かぶきもの有て召捕候、是は二三年以来、江戸中の若キ衆、ならびひちをはる下々迄、皆一味同心して、逸兵衛組と号し、一同の思ひをなし、互の血判の起請文書、其趣は、此組中何様の事有_レ之共、互に身命を捨、見つき可_レ申候、縦親類父主にもおもひかへ、兄弟より頼母敷可_レ有_レ之と申合候、大将の分は、大風嵐之介、天狗摩右衛門、風吹散右衛門、下々組頭ハ、大橋摺右衛門と申者、江戸中に充滿して、所々に辻切不堪破喧嘩及_二數度_一之間、御法度被_二仰付_一、下々左様ノ有_レ之ば、召捕断罪可_レ被_二仰付_一由被_二仰出_一」

大鳥井逸兵衛は、したはら鍛冶(長年経験を積んだ悪賢い鍛冶屋)を頼み、三尺八寸のいか物作り(見るからにいかめしく作つた太刀)にうたせ、「二十五迄いき過たりや逸兵衛」の銘を切りつけた腰の物をさしていた。「かぶき者」は、みな大刀長柄をさしていたのである。このように、「かぶき者」は異装の者が多かつたが、ただむやみやたらと並みはずれて華美な風体をしたり、異様な言動をとつたり、悪の限りをつくしたのではないようである。身分の秩序を重んじる徳川封建社会に反抗し、社会からはみ出た人々であつた。彼らの自己主張がそのような行動をとらせたのである。

恨の介は、「かぶき者」であるといえるだろうか。恨の介は、恋人もなく、清水に願をかけ、人々の騒ぎを一人で眺める寂しい人物として描かれている。また、雪の前を見初めた時も少しも、この美女の身許素性を尋ねたいと思つて幕の近くに立寄つただけであつて、前述の「かぶき者」のように、刀を振り回し、美女をさらうことなどせず、侍女に見つかった後も礼儀をつくし、ひきさがつてゐる。垣間見ることは、光源氏など中世の物語の主人公達も行つてゐることであり、雪の前の後をつけたということも、多少大胆ではあるが、恋する若者の行動である。また、雪の前との恋を成就させるために観世音

の加護を頼むという方法をとる。そして、望みが叶った後も「後生にて」という雪の前の言葉を聞いて、すっかりふさぎこんでしまう。このような人物が、「かぶき者」であるとは思えない。彼の友人、夢の浮世の助、松の緑の介、君を思の介、中空恋の介は、恨の介の恋やつれを心配して集まり、

我々が存分には、命を限りにいざやたゞ、近衛殿へ参りつゝ、門の辺に隠れて、かの姫のいづ方へも御出の無き事よもあらじ。もしさもあらば、かの君を中にて奪い取り申さん。自然咎むる人あらば、腕の骨の続かん程、太刀の柄のあらん限り、切り乱すものならば、思ひ合せ此五人、いかなる猛き武士共、固めりたりし閑なり共、打ち破らんは易かりけり。

これが、「かぶき者」の行動に近いといえるかもしれない。しかし、恨の介の言葉によつて思いとどまっているし、彼らの言動も恨の介を思うあまりのことである。身分制度からはみ出た人々が、不満をぶつけているのではない。恨の介達を、「かぶき者」とよぶには、無理があるようである。作者は、恨の介を「かぶき者」と想定して描いたのではないのであろう。

(1) 日本古典鑑賞講座「御伽草子・仮名草子」(「恨の介」解説)

* * *

松田修氏は、⁽¹⁾「恨の介」は慶長十四年七月の宮女密通事件を契機として成立した物語であると主張された。宮女密通事件とは、「大日本史料」第十二編の六によると、

是ヨリ先キ、典侍広橋氏、権典侍中院氏、掌侍水無瀬氏、唐橋氏、命婦諷岐等ト、鳥丸光広、大炊御門頼国、花山院忠長、飛鳥井雅賢、難波宗勝、徳大寺実久、中御門宗信等、姦淫ノ事露ル、是日勅シテ広橋氏以下ヲ、各、其家ニ廻シ、光広以下ノ官位ヲ停ム

この事件と「恨の介」を比較すると、相違がみられる。この事件は、公家衆の好色グループと宮女の集団の交渉であるが、恨の介は、「自ら幼少より小弓に小矢の本末も知らざりき頃より」「関東下野の辺に故有人」という点から武士であろうと想像される。そして、恨の介と雪の前の単独の恋愛であり、集団ではない。この事件が、「恨の介」に何らかの影響を与えたとは思えない。現在、松田氏説は、野間光辰氏等によつても否定されている。

野間光辰氏は、松田氏説にかわつて、慶長十一年五月十日に非行(禁裏女房との密通事件)により改易された伏見城番衆、松

平近次の事件が、「恨の介」に影響を及ぼしているのではないかという説を出された。松平近次とは次のような人物である。

東照宮に仕へ奉り御小性に列し、慶長八年二月御入洛のとき御供の列にあり、十二日従五位下若狭守に叙任し、二十五日御参内の時供奉す。この年御徒の頭をかぬ。十一年伏見城松丸の守衛に加はり、五月十日女色に耽りし事により、御気色かうぶり改易せらる。(寛政重修諸家譜「第一巻」)

この事件を「恨の介」と比較すると、雪の前は武家出身であるが、現在は、近衛殿の養女であり、恨の介は武士であり、この事件に関係する松平近次・宮女と、その身分は一致する。また、近次と宮女の単独の事件であり、この点でも一致がみられる。近次は伏見番をつとめていたところから、京の伏見・深草あたりに住んでいたとも考えられる。恨の介の友人が恋やつれて寝ている恨の介を見舞う所が深草である。この点でも一致がみられる。野間氏の説通り、この事件は「恨の介」に大きな影響を及ぼしているであろう。しかしあくまでも影響を及ぼしているだけで、作者は、松平近次事件そのものを、そっくり描こうとしたのではないのであろう。この事件を基礎として物語を描いたのではなく、中世風小説という枠組の中に、それを巧みに取り入れたのであると思う。

(1)「うらみのすけ」をめぐる――仮名草子から浮世草子へ――
〔国語国文〕昭30・12

二 「恨の介」と殉死

観音のお告げにより、恨の介が、庄司の後家を訪ね、雪の前の身上話を聞く場面がある。雪の前が、豊臣秀次の家老、木村常陸介重茲の遺児であることを説明するために、作者は豊臣秀次事件そのものに、かなり多く筆を費している。それも、秀次に関してではなく、雪の前とは直接関係がないと思われる秀次の寵愛の妻妾達についてが大部分である。秀次が処刑された原因については、秀吉に対し秀次が謀反の心を抱いたとする石田治部少輔三成の讒言によるとしている。そして、秀次処刑後、三十余人の妻妾たちが、秀次の死骸を目の前にして、涙にむせぶ。中でも、出羽の国の住人、最上殿の娘おこぼが、
南無阿弥陀蓮の露とこぼるれば願の岸に到る嬉しき⁽²⁾
と遊ばしければ、是を始めとして、我もくくと一首を連ね給ふなれば、まことに秀次の御死骸も動くばかりに見えにける。その後おこぼの仰せには、「いづれも念仏し給へや」と言ひもあへず、衣の下より守り刀を抜き出し、切先を衝

へつ、「南無阿弥陀仏」を最後にて俯し給ふ。残りの姫たち御覧じて、「あら涼しの最期や」と、我もくと御自害し給ふなり。

このように、庄司の後家によつて妻妾達の自害について語られるが、史実は異なる。文祿四年八月二日、

秀吉、故豊臣秀次ノ子女・妻妾三十余人ヲ京都三條磔ニ殺サシム〔史料綜覧〕卷十三

「恨の介」よりも後の成立とされる「聚業物語」(元和九年)

「太閤記」(寛永三年)でも、豊臣秀次事件をとりあげているが、どちらも、史実通り、妻妾達の殺害という形をとっている。

「太閤記」は、愛妃の辞世の歌を連ねた後で殺害の様子が書かれており、「聚業物語」は、愛妃の身の上を長々と説明し一人一人の辞世の歌をのせて、

草の葉をなぐやうに引出し／＼御くびふつ／＼とうちおとし／＼。大なるあなをほりて。その中へ四つの手あしをとり。なげ入れ／＼したる有様

と殺害の様子を描いている。「恨の介」だけが、史実を曲げているのである。豊臣秀次事件と言えば、誰もが知っていることである。実在の人物、木村常陸介重茲という名や秀次事件を出しておきながら、何故、妻妾達の自害という形をとったのだらうか。第一、雪の前の身の上を語るためならば、父、木村常陸介重茲について語ればよいことである。何故関係がないとも思える秀次の妻妾達のことをとりあげたのであらうか。

(1) 「聚業物語」では「最上殿の御むすめ」として紹介されているのは、「おいま御前・十五歳」であり、十一番目に名前がある。また「太閤記」では、同じく「おいま御方」であるが「十九歳」と年齢が異なっている。

(2) 「聚業物語」では、おいま御前の辞世の歌は「つみをさるみだのつるぎにかゝる身の何か五つのはりあるべき」で、「太閤記」では、「故もなき罪におふみのかゝみ山くもれる御代のしるしなりけり」となっている。

(3) 寛永後期刊行と推定される「寛永丹緑本」は、おこぼの辞世の歌の後に九人の歌を連ねてあり、つじつまのあうように文をつなげている。これは、「聚業物語」などの影響をうけているのだらうか。ただし、「聚業物語」「太閤記」とも、これと一致する歌は一首もない。しかし、妻妾達の自害という形は、変わっていない。

(4) 続群書類従第八百七十五

(5) 岩波文庫

* * *

「後生にて」という雪の前の言葉に絶望して死んだ恨の介が

残した手紙を読んで、雪の前は「あつとばかりの給ひて」死んでしまふ。そして、その名の如く、あまりにもはかなかつた雪の前の死を悲しみ、庄司の後家、あやめ殿、くれなるが次々と後を追つて死んでいく。作者は、この雪の前をとりまく人々の死について、比較的長く語っている。庄司の後家については、

庄司が後家申すやう、「庄司に別し其時に、諸共となり行べきを、この姫故にこそ止まりしに、此姫はかなく成給へば、此世に有ても千年を保ち、万年の齢かや。春を止むるに春止まらず。人帰つて寂寞たり。くわんせいの固めをも聞かぬは生死の道なれば、一度生を受け、滅せぬ人の誰かある」と西に向ひて手を合せ十念し、此姫に抱きつき、自害してこそ死したりけり。

とある。

次にあやめ殿が、

人と契るはさは無きぞ。その上自らが文の通ひの事のみして、色々に口説きしに、只何事も自らにこそ任ずると心を置かず、誠に兄弟より外に、互に思ひし中なるに、とてもこの事に後生まで契らむ

と言つて、雪の前によりかかつて自害する。古写本⁽¹⁾では、あやめ殿についての記述が詳しくなり、

いさやもろともに行んとて御ちかいかく計

くずの葉によるうす雪の消て後

こゝろさみたれあやめかれゆく

とあそはしはたのまほりよりしゆゑんの珠数をとりいたし西にむかいて手を合つたへ聞女子は後生さい生にゑらはれて罪のふかきと承只今しがいのみつからをたすけ給へや阿弥陀仏とこれをさいこの言葉にて

という文が加わる。これは、古写本のみに見られるものである。菊亭殿の御娘である、あやめ殿が辞世の歌もなく自害するのは、不自然であると思つたのだからか。あやめ殿の自害の場面に関しては、古写本の文章を加えると、より詳しい記述になる。

そして、くれなるは、

雪の前殿御死骸、庄司が後家の死骸、葛蒲殿の御死骸、一

つ枕に引き纏ひ、薄衣を引掛けく、思ふさまに介錯し、

其後紅は、常々我君の枕上に置き給ふ守刀抜き持つて、心元に刺し立て、同じ黄泉となりけり。

となる。

「あつとばかりの給ひて」死んだ雪の前は、確かに、はかないゆゑの美しさというものを持っている。しかし、雪の前をとりにまく人々の自害の印象は、雪の前の死も、恨の介を追つた自

書であつたと勘違いする人も生んだ(『江戸文学辞典』⁽²⁾ 磯崎康隆著・「物語草子目録」横山重・巨橋頼三編が、そうである)ほど強く、華々しいものである。この印象の強さ、華々しさは、豊臣秀吉に殉死した妻妾達の最期を思い出させる。この二つの場面は、「恨の介」の中でも異色であり、恨の介、雪の前の恋愛を中心とするならば、傍系にあたるものである。しかし、この場面が、他の物語と比較して、「恨の介」固有のもので、その特徴となつてゐることは、確かである。

(1) 元和または寛永初め頃、作品成立間もないころの書写で、古活字版十行本(元和初年刊)と比較して異同が多いが、整版本により改変される前の原形を示す。

伯州大学人文学部蔵

(2) 富山房

……雪の前と契つたが、その後逢瀬のはかばかしからぬのを歎いてついに焦れ死んだ。その由を知つた雪の前も悲歎のあまり自害するといふクラシックな恋愛物語であるが……

(3) 角川書店

恨の介は最後の文を、雪の前にとゞげんことをたのみて死す。雪の前、かの文を受けて悲しみ歎き、己も自殺すれば……

三 秀次事件と恨の介・雪の前の恋

豊臣秀次の妻妾と雪の前をとりまく人々の自害には、共通点がある。どちらも、その死は、殉死であるということである。

「殉死」とは、主君の死に対して、臣下または家族が、これに従つて死ぬことをいう。これは、来世というものが、存在し、生前の生活に類似する生活が、来世においても行われるという觀念に基づいたものである。

『日本書記』垂仁二十八年の条に、天皇の叔父、倭彦命を葬つた時に、その近習者を悉く生理めにしたことがあり、これが我が国における殉死の初めとされている。しかし、三十二年には、皇后日葉酢媛命の葬儀の折に殉死は禁じられ、その代わりに、野見宿禰の献言に従つて埴輪をつくり埋めた。

その後は、殉死について見る事ができないが、武家時代になり、戦場で主君と生死をとものにすることから転じて、再び主君の死に際して殉死するということが起こつた。明徳三年(元中九年)に細川頼之の死に際して、家臣三島外記が殉死した時、『明徳記』(『群書類従』第三百七十三)に、

凡人ノ家僕タル者。戰場ニテ主ト同討死スルモ腹ヲ切モ古

今ノ間ニ多カルベシ。又ハ主ノ討死スル所ヲ見捨テ逃モ有
ゾカシ。病死ノ別ヲ悲テ。正ク腹ヲ切テ同死徑に趣事。前
代未聞ノ振舞哉ト各是ヲ称美シテ。皆感涙ヲ流シケリ。

と述べられており、当時、殉死があまり行われていなかったこ
とがわかる。元龜二年、島津貫久の死に際して平田某が、また
天正十二年筒井順慶の死の際に某が、文祿四年、豊臣秀次の切
腹の時、近臣が殉死したという例がある。しかし、これらはま
だまれな例であり、盛んになるのは、慶長になってからである。
慶長十二年三月五日に、尾張清須城主松平忠吉の死に対して、
その家臣小笠原監物忠重、石川主馬吉信、稲垣将監忠政、中川
清九郎が殉死している。これが、江戸時代に起こった最初の殉
死である。

一説に正木左京。千本掃部といふ名をしるす。又四十八人
といふ説もあり。(家忠日記追加)⁽¹⁾
四十八人というのは、後世の人々によるもので実際の数は、こ
れよりも少なかったと思われる。また、しばらくした十七日に
は、

薩摩守忠吉卿の家司小笠原和泉守吉次が子藍物忠重は。幼
童たりし時より卿の寵眷を蒙りしが。去年よりいさゝか御
けしきにたがひ。奥州松島に蟄居す。しかるに卿のうせ給

ひしをき。俄に松島をたち出しが。卿増上寺に葬らる、
よしをき。て、この日寺にいたりて殉死す。(当代記)⁽¹⁾
また松平忠吉の陪臣も殉死している。

忠重が寵童佐々喜蔵(一に佐々木清九郎。又佐々喜内)も
またその主の為に追腹切て。同じく葬られしとなり(異本
落穂集)⁽¹⁾また其臣平岩長右衛門親直も(中略)卿の卒去を
聞て同じく追腹切て死したり。(家譜)⁽¹⁾
『慶長年録』⁽²⁾によると「殉死の五人も悉に葬礼をいとままる」
とあり、非難的ではない。

慶長十二年閏四月八日にも、越前北庄城主結城秀康の死に対
し、家臣土屋昌雄・永見貞武が殉死しているが、それに対して
大御所は、

御けしきよからず。凡その臣たる者主恩をしたはゞ。よく
其遺命を守り身を全くして主の子孫を。補佐し忠勤すべき
を。殉死して何の益あらんや。(駿河土産)⁽²⁾

そして、慶長十二年閏四月廿四日には次のような記事がある。
越前の家司等へ。大御所御手書を賜はり。藩士の殉死を禁
じ給ふ。死は易くして生は難し。汝等。ながらへて幼主を
補導し。国家を保護すべし。(中略)もし黄門の恩を忘れて
さる心がまへあるものならば。其子孫までも罪せらるべし

との御旨なり。⁽²⁾

徳川家康は、殉死を快く思っていなかったようである。

慶長十六年正月廿一日には、薩摩鹿兒島城主島津家久の伯父龍伯の死に対して家臣新納忠朝等が殉死している。

殉死する者十有五人、所謂新納武部少輔忠朝、肥後權之丞、

武彦左衛門、山口对馬、村岡豊前、染川源之丞、林仙朝坊、

吉井佐渡入道、岡本讃岐入道、田尻小吉、市来清右衛門、

赤塚吉右衛門、浜田民部左衛門入道栄林、新原藤左衛門、

春田佐渡入道是なり(西藩野史)⁽³⁾

殉死者は「葛を公の廟前に築く、寺僧をして永く祭祀を怠らさうしむ(西藩野史)」扱いをうけている。

「塩尻」⁽⁴⁾に、越前中納言秀康卿の死に際して、土屋昌雄、

永見貞武が殉死した時に、

追腹仕るとて、尾張家の臣になしかはおとるへきに、六十日余りおくれし故、日本追腹の手本とならざる事くちおし

と述べたとあり、近世流行した追腹の始めである、と書かれていることから、松平忠吉に対する殉死が近世の一連の殉死の初めとなることがわかる。それだけ、この件は、当時の人々にとって驚くべきことであり、印象に残ったであろうと想像できる。

「恨の介」は、元和初年頃に刊行されたものが現存している(古活字版十行本・天理図書館蔵)。したがって、物語に影響を及ぼした可能性があると考えられるのは、以上の殉死事件である。「恨の介」が成立したと思われる慶長末期は、殉死が盛んになろうとしていた頃である。

秀次事件の妻妾達や雪の前をとりまく人々の殉死は、こうした時代背景をとり入れたものであろう。秀次事件の妻妾達の死を殺害から殉死という形に変えた理由の一つがそれであると思われる。

しかし、殉死だけをとりあげようとするならば、直接関係がないと思われる妻妾達よりも、雪の前の父、木村常陸介重茲の死について書いた方がよかつたのではないだろうか。木村常陸介重茲の事跡は、はつきりしていない。秀次事件に座して、摂津茨城の大門寺で自殺した(野史)卷四ということは確からしいが、木村単人を同一人物としているものも、また、その父であるとしているものもある。その一生が、あまり知られていない人であるので、「恨の介」の作者は、好きなように脚色できるはずである。また、雪の前の父親であるので、その死を描くことによって雪の前の悲劇性も高まるであろう。しかし、語り手である庄司が後家の夫の直接の主君である木村常陸介重茲につ

いては、

こゝに中納言の御若年の時分より、片時も離れ申さず、木村の常陸と申て、我らがためには先祖の主、もとよりこれも御は、にて、夫婦諸共に草葉の露と消え給ふ。

これだけしか記述がないのである。したがって殉死を誓うためだけが、理由ではないと思われる。

妻妾達の死と雪の前をとりまく人々の死は、一つの対をなしている。作者は、雪の前と恨の介の恋の悲劇的な結末の伏線として、秀次事件を利用したのではないか。関東の武士である恨の介と宮中の女性、雪の前との恋は、一度は成就したかのように見えたが、雪の前の「後生にて」という言葉をきっかけに破綻する。そして、恨の介の病死、雪の前の衝撃のための死、またそれだけではなく、雪の前をとりまく、庄司が後家・あやめの前・くれなゐの死。二人の恋は、二人だけの問題ではなく、二人を含め、計五人もの死を招くという結末をむかえる。実は、その結末は、床司が後家によって語られる秀次事件によって暗示されていたのである。

秀次を追って、妻妾達が次々と殉死する。秀次との恋を他人によってひきさかれた妻妾達は、その恋を成就させるため、死を選んだのである。そう描きたいたためあつて、作者は、「殉死」

という形をとつたのであろう。

閑白という地位にいた秀次とその寵愛をうけていた妻妾達は、栄光につつまれていた。しかし、それは、「秀次の謀反心」という石田三成の「讒言」により、一転して暗い結末をむかえた。

その事件は、雪の前の運命を大きく変え、最後まで雪の前と恨の介の恋にも秀次事件は、大きな影を落とすのである。そのため、作者は、一見、脱線しているとも思える秀次事件について長々と語るのである。そもそも、雪の前の運命を握っていたのは、父・木村常陸介重茲ではなく、秀次事件なのである。雪の前は、秀次事件により、武家の娘から近衛殿の養女となり、華やかな世界で暮らすようになる。しかし、秀次事件によって支配されている雪の前は、そのままではできない。そして、運命は、雪の前の命をもうぼうのである。

雪の前をとりまく人々の死は、純粹な「殉死」である。彼女達は、恨の介と雪の前の恋に殉じたわけではなく、雪の前のために、死を決意したのである。これは、当時流行の殉死をとり入れ、雪の前と恨の介の恋に、悲劇性と華やかさをそえるという効果をも、ねらつたものであろう。

- (1) 「徳川実紀」所収「台徳院殿御実紀」巻五による
- (2) 「徳川実紀」所収「台徳院殿御実紀」巻五による

(3) 「大日本史料」による

まとめ

「恨の介」は、雪の前と恨の介の恋愛を描いた物語である。

男が女を見初め、恋の成就を観音に頼み、手紙のやりとりをし、一夜をともしにする。大筋において、これまでの中世風物語と何ら変わりはない。

しかし、中世風物語という枠組みの中で、近次事件、秀次事件、殉死をとり入れ、さらに流行の「浄瑠璃物語」「幸若舞曲」からの文章をとり入れるという新しい試みをしている。中でも、秀次事件を恋愛物語を支配するものとして、巧みに利用している作者の手腕にはすばらしいものがある。

このように、作者は、人々の関心を呼んだ事件などをとり入れ、「恨の介」を中世風物語とは一味、異なる物語を描こうとしたのである。

〈参考〉

守屋毅「かぶき」の時代（角川書店、昭51）

三上参次「江戸時代の殉死に就いて」

「史学雑誌」第三十八編第十二号・昭2・12

なお「恨の介」の引用はすべて、日本古典文学大系「仮名草子集」のものによった。（底本は、古活字十行本である。）